

本学学生教育について私の経験からのある提案

— 教育は学生への愛から始まり、愛することは不合理である —

長村 洋一

鈴鹿医療科学大学 客員教授・前副学長（学生・社会貢献担当）

一般社団法人日本食品安全協会 理事長

寄稿

本学学生教育について私の経験からのある提案

— 教育は学生への愛から始まり、愛することは不合理である —

長村 洋一

鈴鹿医療科学大学 客員教授・前副学長（学生・社会貢献担当）

一般社団法人日本食品安全協会 理事長

キーワード： 留年生，再試験，放蕩息子，マザーテレサ，国家試験

要旨

私は約 50 年間教育現場に身を置いてきた。その経験に基づいて本学の教育に対し次のような提案を行いたい。本学の学生教育において多くの学科で留年生を多く輩出させているがそれは間違いである。留年させてやり直させるのではなく、愚かに甘やかさずその学生にとって最高の利益になる「私でもやればできる」という感覚を身に付けさせることを実行しなければならない。そんな教育の在り方の参考になるのは聖書のなかの放蕩息子の話である。本学の学生の多くは、高校卒業までにあまり勉強をしてこなかっただけのいわば放蕩息子たちである。彼らを留年で脅すのではなく、暖かく迎え入れれば人が変わったように勉強を始める。そして国家試験を突破する実力は簡単に身に付く。

再試験が日常的に行われる大学

この度編集委員会から、退職記念講演の内容を纏めて好きなお考えを書いてください、との大変ありがたいご依頼を頂いた。私自身は昭和41年に大学院生のアルバイトとして現在の藤田医科大学（当時名古屋衛生技術短期大学）で生化学の講義と実習を教えに行き出したのが教育に携わるきっかけとなり、約50年を教育現場で過ごしてきた。振り返ってみて、私は学生時代には全く思ってもみなかった教育分野に身を投ずる原因となった事件で学んだことをそのまま引きずって実行してきた感がぬぐえないのでまずその最初の経験を紹介させて頂く。

私は前述の名古屋衛生技術短期大学へ教えに行っていたときに私の実習の助手として教材の準備、実習の準備をしてくれていた寺平良治先生（彼は後に短大の学長および4年制の衛生学部長まで務めた）の影響を大きく受けた。私は彼が揃えてくれた教材を基に臨床検査技師教育という分野に初めて足を踏み込む緊張感を持って自分なりに努力して準備した内容を講義し、実習に臨んでいた。しかし、実習講義の時に学生が話をしているようが、いまいが、お構いなく話を続けていた。そんなある日のこと、寺平先生が私に「先生、少しで良いのですがマイクをかかしていただけますか。」と言って私のマイクを取り上げた。彼は学生に向かって大きな声で「お前ら何だ、先生が教えてくれていることは、お前らにとって非常に大事なことだぞ、」との言葉を皮切りに人が変わったかのようにすごい勢いで学生を怒りつけた。約250名の学生でざわざわしていた講堂がシーンと静まりかえった。

学生に向かって寺平先生が静まり返った講堂で、怒りを心底ぶつけて切々と訴えている内容と、彼が怒りながらも目に涙を浮かべているのではないかと見える（あるいはそうだったかもしれない）姿に、私は全身全霊を打たれる思いをしたのを今でも鮮明に思い出すことができる。私は当時いわゆるバイト根性で時間だけこなして帰るのみの教師で、決して将来大学の先生になろうなどということは考えていなかったのもこの場で受けたショックは大きかった。

この短大では教えている学生がもしできなければ、で

きるまで教えるのがシステムとなっていたため、再試験は第5回まであって、それでもダメな学生には特別再試験があった。自分が受けた教育では国家試験対策などと言う授業もなく再試験すら考えられないような環境だったので、この教育状況を容易には受け入れられなかった。ただ再試をするたびにアルバイト教師である私には給与が頂けたので問題レベルを下げることなく気軽に学生を不合格にした。そんな状況だったので、私は腹の中ではこの大学の教育姿勢に対し「こんなの大学じゃない」と軽蔑の念を強く持っていた。

この事件が起こったのは、私がアルバイトとして教え始めて4年目に入ったばかりで大学院生としての最終学年を翌年に迎え、終了したら製薬企業の研究所で頑張るぞ、と就職を考え始めているときであった。一方で創設者藤田啓介先生から、医学教育の拠点となる大学をつくるから手伝ってくれ、と強い勧誘も直接受けていた。しかし、間違ってもこんな学校へは就職しない、と私は考えていた。当時はバブル経済が始まる頃で私としては製薬企業の研究室に就職すれば大学よりはるかに良い給与と研究環境が目に見えていたので「絶対にこんな大学などに就職しない。」と決めていた。

ところが若かった私はもう一つの大きな別の悩みを抱えていた。それは気障っぽく言えば「人間の原罪」といったような問題で、一度過ちを犯した人間にはもう人間としての価値がないのだろうか、という問題である。私は自分自身がそれまで生きてきた過程が非常に自分勝手に、私によって犯罪には該当しなかったが、間違いなく犠牲を被らせられた人に対して犯した罪の許しは存在するのか、と言った疑問に強くさいなまされ、多くの哲学書や宗教書を傍らで読んでいた。こんな疑問を持っていたこともあってこの大学を軽蔑しながらも、特別再試験まで行って学生を救い上げる教育の在り方には関心があった。

そんな矢先であったので、この寺平先生の学生（彼にとっては後輩でもある）に向かって怒っている姿から滲み出ている後輩に対する深い愛情を私は感じ取り大きな感銘を受けた。彼が、再試験を何回も受けている学生を励ましている姿も、結局は彼の愛情のなせる業であることが理解できると同時に夜遅くまで骨身を惜しまず学生の

面倒を見ている姿を、真の意味で理解し、改めて深い感動を覚えた。この事件を契機に寺平先生が私に時々漏らしていた「先生のような方がこの大学には欲しい。もし来ていただけたら先生と一緒に教育と研究をやりたい。」との言葉を思い出し私はこの短大へ就職をすることを決意した。

そして「世間からはもう駄目な奴」と烙印を押された学生の姿を、罪の意識にさいなまされている自分に重ね、彼らを立ち直らせることに自分の人生をかけてみることにした。それは、「一度ならず過ちを犯した人間」が、弱い人達に奉仕をすることにより何処まで自分の犯した罪の許しを得ることができるか、との問いかけへの挑戦でもあった。こんなことが切っ掛けで教育の世界へ身を投じてきた一人の教員の言葉として読んでいただければ幸甚である。

マザーテレサの言葉に学ぶ

マザーテレサは「人は不合理、非論理、利己的です、それでもなお、人を愛しなさい (People are unreasonable, illogical, and self-centered, LOVE THEM ANYWAY)」と言っているが、私はこの言葉を「学生は不合理、非論理、利己的です、それでもなお、学生を愛しなさい。」と言い換えたい。ここでいう「愛」とは「人への愛」で、個人的な感情を超越した、幸せを願う深く温かい心である (goo 国語辞書より)。

医療人の最も大切なことは「病める人々への限りない愛」である。全身全霊をかけて患者さんのために働き、その患者さんのために自らの命を落とす、これほど大いなる愛はない。医療職は、職そのものに高潔な倫理観が要求されている。人類の疫病との長い戦いの中で、医のために命を落とした医療職者は数限りなくいる。現在のコロナ禍においても世界中で多くの医療従事者が亡くなっている。

こうした医療分野に敢然と足を踏み入れて患者と共に戦える心意気は、一度過ちを犯し、そこから立ち直った人に備わりやすい、と私は確信している。献身的な医療行為が人々から感謝されるのは、不能または調子が悪く

なった人々を元の状態に戻すからであり、多くの人を最も感動させるのは、本来なら死んでいたかもしれない人が助かり社会で再び活躍するときである。近くは池江璃花子にそんな姿が見える。

医療職者は医の様々な場を通して人の生き方を学び、患者は様々な病気を通して「生きる」という意味を考える。そして絶望的な死の淵から立ち直った人は、時に人が変わってしまうことがあることは、医療現場において良く眼にする現象である。ところが私は、学生教育の現場において医療現場においてみられるのと同じような現象をいくつも経験してきた。

本学にはいわゆる受験戦争を含む学校教育の「負傷者または弱者」とも言うべき学生が相当数いる。「負傷者または弱者」となっている人たちに対して、国家試験という彼らの戦わなければならない新たな戦争のために「健康者」のような訓練をいきなり課しても待っているのは「挫折」である。医療者が患者の状態に応じて治療を行うように、学生にはレベルに応じた訓練を課さなければならない。私は本学には残念ながらこの意味を芯から理解されている先生が非常に少ないと感じている。「留年させれば奮起して頑張る」という考え方は、本学の多くの成績不良学生には通用しない考え方である。

最近全学的に始まった「留年しそうな学生にもう一度チャンスを与えてやろう」という大学の在り方について、真面目に単位を取得している学生は「先生、そんな馬鹿な、奴らは勉強せずに遊んでいたからそうなったので、それを今さら助けるなんておかしい。」と言い、教育熱心な真面目な先生の多くの回答は「そうだよな、君のいうとおりさ、そんな事をしたら真面目にやっていた君たちが馬鹿を見て可哀そうだよな。」と回答をされる。

もっと真面目に大学の教育の在り方を考えられている先生が、学科会議において私が成績不良学生の再生を提案したとき「そんな成績の悪い学生を無理して国家試験に合格させたりするのは、危険な人物を医療職者にすることになるから国家的犯罪である。」とまで反論されたことがある。この先生の考え方に基本的に同調される先生は今でも本学に結構おられると感じている。

しかし私はこの考え方は大きな誤りである、と考えてい

る。私の経験（全国の臨床検査技師の約8千人は実習も含めて指導した教員で、その後も交流が続いている）から断言できることは、在学中の成績が悪くても社会では大きな成功を収めている学生は非常に多い、である。在学中の成績と社会へ出てからの活躍はある程度関係があるが、もっと関係があるのは“人柄”である。

放蕩息子が許されることを理解する困難さ

新約聖書のルカ伝第15章には「見失った羊のたとえ」、「無くした銀貨のたとえ」そして「いなくなった息子のたとえ」の3つのたとえ話があり、無くしたものが出てきたことの喜びの話が出ている。この3つのたとえ話の最初の二つは簡単に理解できる。しかし第11～32節の「いなくなった息子のたとえ」話は理解に苦しむ部分がある。これは放蕩息子の話としてよく引用され、レンブラントやホントホルストが絵画としても描いている。

概略は、ある人に二人の息子がおり、その弟が財産の分け前を父に請求した。父は要求通り二人に身代を分け与えた。弟はその身代をもって旅に出て身を持ち崩して財産を無駄遣いしてしまった。そんなとき大飢饉が起きて、彼は食べるものにも困り果てその地方の裕福な人のところに身を寄せたところ、豚の世話させられた。彼はその豚のえさを食べたいほどに苦しむことによって自分の父と雇人の姿を思い出した。父のところは豊かなのに、自分はここで飢えて死のうとしていることから、帰るべきところは父のところだと気づき帰途に着く。家に帰った彼は「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」と言った。

ところが、父は帰ってきた息子を見ると、走りよってだきよせ、帰ってきた息子に一番良い服を着せ、足に履物を履かせ、仔牛を一匹使って盛大な祝宴を開いた。その祝宴の最中に家に帰った兄は父親に「私は何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、私が友達と宴会をするのに子山羊一匹すらくれなかったのに、あんな放蕩息子が身代を食い潰して帰ってきたらこのような歓迎をしている。」と不満

をぶつけ、放蕩のかぎりを尽くして財産を無駄にした弟を軽蔑した。しかし、父親は兄をたしなめて「子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。喜び祝うのは当然ではないか。」といった。

この物語の主題は、神に逆らった罪人を迎え入れる神のあわれみ深さと偉大さの論である。しかし真面目にやってきた兄貴の気持ちにもなってくれ、というのが多くの特に真面目に生活している人々の正直な感想でもある。実は真面目な学生と成績不良の学生を同時に面見しなければならない我々教員の立場はこの話に例えるならば神様の位置になる。そしてその立場にある多くの先生方は、真面目な生徒のみが報われるべきで、不真面目で成績の振るわない学生は次の学年に迎え入れられないのは当然のことである、と考え行動をしている。しかし私は困難ではあるが、教師としては両者の救いの道を考えなければならず、その場合真面目に勉強しなくて成績不良となった学生をどう救うかが最大のポイントと考えている。

聖書にはこの放蕩息子の後日譚がないのでわからないが、おそらく父の農場で兄貴以上の働き者になっていたのでは、と私は最近想像できるようになってきた。それは多くの成績不良学生が立ち直った姿を見てきた私自身の教育経験からの推測である。本学へ入ってくる学生の多くは、まさに真面目な学生が一生懸命勉強しているときに、それをしてこなかった放蕩息子のような者である。彼らに目覚めを与えることができれば、人は変わる。

許すことと甘やかすことは別ごとである

この放蕩息子の話を引き出すと、学生を甘やかすことではないかとの批判が出てくる。しかし医療や教育においての愛はたんに甘やかすことではない。ここでフローレンス・ナイチンゲールが言った「最も上手に人をおさめるのは、自分の責任下にある人を、愚かに甘やかすのではなく、その人にとって最高の利益になることを、親身になって考える人です。」という言葉引用させて頂きたい。

やさしさだけで医療はできないものである。医療には患者の利益になることでも、患者にとって大きな苦痛を伴うことがあり、医を行う側には患者が嫌がっても医療を行う的確な判断力と多大なエネルギーが必要である。学生教育も同じで、ナイチンゲールの言葉を少し変化させると、「最も上手に教育する先生は、自分の責任下にある学生を、愚かに甘やかすのではなく、その学生にとって最高の利益になることを、親身になって考える先生です。」となる。

私は、成績が振るわない学生に最高の利益となる教育は「私でもやればできる」という感覚を身に付けさせることである、と確信をしている。「私でもやればできる」という最高の利益を与える教育は決して甘いものではなく、成績不良学生には苦痛そのものでしかない。従って学生にとっては“いじめ”に間違えられそうな厳しい指導をした。

例えば国家試験に関係する非常に重要なことを絶対間違いなく書けるようにさせる、どんな数字になっても使用するべき公式を思いつける、重要な画像を見たとき正確に言い当てられるといった内容のことを何回もやらすことによって量は多くないが一定の事項に関して最低限これだけは寝ていても応えられる、というレベルに持ってゆく。この単純作業は学生にとっては非常な苦痛であり、種々の理由を付けて逃れようとする学生がいたが私は絶対に許さなかった。

この一定の事項と言うのは国家試験を受けたとき30%位しか得点できないレベルである。最終学年に国家試験勉強の追い込みをかけて合格させるのにはこのレベルで進級させれば、十分である。先生方から時々聞こえてくるのは「国試の前だというのに、こんなことも知らない学生がいる。」という言葉である。それは学生がダメなのではなく、そんな風にして学生を進級させた先生の責任である。教えたはずなのに覚えていない、その教育方法を再考する必要がある。ここで強調しておきたいのはこの教え込んだ一定事項とは最終学年になっても直ぐ思い出せるレベルにしておくことである。成績が振るわない学生に最高の利益となる教育は先生の専門分野の知識を増加させることではなく「私でもやればできる」という感覚を

身に付けさせることである。従って少量で良いからその分野の攻略できる方法論をまず身に付けさせることである。

私はかつて「留年ゼロ作戦」なることを言い出して多くの方から嘲笑と批判を買い、具体化しなかった。しかし「医療において絶望の死の淵から立ち直った人は時に人が変わってしまうことがある」ように、絶望的な状況から立ち直った学生は、あの時を思い出せば、という考え方を獲得し「もう一度挑戦してみよう」という気力を生み出す技を身に付けることができる。この「もう一度挑戦してみよう」という気力は、そのまま「私でもやればできる」という感覚となり、彼らの生涯の宝となる。

もう一つ重要なことは、成績が振るわない学生はそれまでの学校教育におけるまさに「敗者または弱者」そのものであり、そうした学生に押す「駄目」という烙印は、そのまま「私はやっぱり駄目なんだ」という確信となり、彼らの大きな「負の遺産」となり、「もう一頑張りしてみよう」という気力を削ぐ。それゆえにこうした学生にこそ「もう一度挑戦してみよう」という気力を与え「私でもやればできる」という感覚を身に付けさせなければいけない。留年させれば奮起して頑張る、という考え方は排除し、徹底して追い込み留年させない作戦が重要である。

臨床検査コース立ち上げの時の決意

私は臨床検査コース（現在の専攻）を森下芳孝先生と立ち上げたとき、検査コースには「留年ゼロ作戦」を実行することを前提とした教育を行うことを約束して学科の先生方をお願いしてスタートした。検査コース全員の先生方が協力してくださった。ここで重要なのは、妥協して進級させるのではなく、一定のハードルを越えさせて合格させることであつた。この大きなポイントは、ハードルをどのように設定するかであるが、原則的には前述のように30%は寝ていても解ける実力を付けさせることであつた。担当科目の特性もあり、細部にわたっては各先生のご判断に任せしたが、ここでも重要なことは、「本学の学生は卒業したら国試が受かる」実力を付けることである。従って、この30%ラインとして何を選択するかは、先

生方の力量の見せ所となる。

実際の結果を表1に示したが、平成25年まで私が学科長を務め、学科長を辞めた翌年の第1回生は全員卒業させて国試は100%合格であった。入学生48名のうち4年間で積み残しは5名であり、3年次、4年次は全員進級させている。この一回生から3回生は新設学科なので入学者が少なかったら大変なことになるとの入学課の心配によりAO入試で理系がまるでダメな学生を10人くらい入学させた学年である。それでも留年ゼロ作戦を基本とした方法でこの結果が得られている。ここで、もう一つ重要なポイントは一回生より後の入学生の方が入学時の偏差値は高いにも関わらず留年をさせるとどうなるかが良く見えることである。(表1)

平成26年に学科長を辞して後次第に私の意見が通りにくくなり、学科としては他学科のように国試の合格率を100%にしようと、進級、卒業を絞るようになり平成29年には卒業学年で多量の留年を出す作戦にでたが、その結果は翌30年のみじめな結果につながった。そして再びできるだけ進級と卒業をさせる方向に向かった。その結果が令和2年度の結果に繋がり見事なV字回復を示

した。

本学における進級判定では、最終学年で国試の模試得点の悪い学生を留年させることが一般的に行われているが、これは大きな誤りである。最終学年の学生は4年間または6年間の教育の成果として出来上がっているのである。従って最終学年で留年を繰り返す学生を何人も輩出させている学科はその先生方全体の教育姿勢が間違っている。

学生の若いエネルギーを力いっぱい引き出すことが重要

本学のディプロマポリシーの重要な一つは「卒業させた学生は国試に受かる」である。すなわち本学の学生に付けなければいけない最低の実力は、国家試験に合格する能力であって、先生の学問分野全般をできるようにすることではない。そのためには国試出題分野科目担当の先生はご自身の担当科目の学問分野全部を中途半端に終了させて単位を与えてはいけぬ。全分野を中途半端なレベルで終了した学生は最終学年になると習ったことをほぼ全て忘れていて、何が重要だったかの感覚もな

表1 医療栄養学科臨床検査学専攻学生の進級状況と国家試験合格率の推移

	平成23年			平成24年			平成25年			平成26年			平成27年		
	学生数	原級留置数	進級・卒業率												
1学年	48	3	93.8%	67	3	97.0%	53	0	100.0%	58	3	94.8%	48	1	97.9%
2学年				45	2	95.6%	64	2	96.9%	55	4	92.7%	57	3	94.7%
3学年							43	0	100.0%	60	0	100.0%	47	0	100.0%
4学年										43	0	100.0%	63	5	92.1%
国試合格率			-			-			-			100.0%			91.2%
国試合格率全国平均			-			-			-			93.8%			87.4%

	平成28年			平成29年			平成30年			平成31年			令和2年		
	学生数	原級留置数	進級・卒業率	学生数	原級留置数	進級・卒業率									
1学年	53	3	94.3%	53	6	88.7%	56	2	96.4%	56	0	100.0%	54	0	100.0%
2学年	48	3	93.8%	52	3	94.2%	50	2	96.0%	51	0	100.0%	56	1	98.2%
3学年	50	0	100.0%	44	2	95.5%	48	0	100.0%	45	0	100.0%	47	0	100.0%
4学年	52	0	100.0%	55	9	83.6%	48	0	100.0%	54	2	96.3%	47	0	100.0%
国試合格率			95.6%			91.3%			77.5%			96.2%			95.7%
国試合格率全国平均			89.9%			90.5%			86.5%			83.1%			91.6%

くなっているのだんな問題もチンプンカンプンである。

学生がこういう状態で最終学年に上がってこないようにするには、まず先生のご担当の国試分野の30%位を正解するために必要な量をハードルとして進級させておくことである。その内容は、国試対策勉強時になっても忘れていないレベルまで教え込んで置くことが重要である。多分この30%と言うのは、その学問分野の非常に重要な事項の単語と骨格を知っているレベルではないかと考えている。このようにして取っ掛かりができていれば後は演習を繰り返すことで国試問題位は解けるようになる。

成績不良学生に30%位の解答能力を付けさせるのには、何度も繰り返しポイントとなる点を教え込むことである。そのために、かつては教師自身が同じプリントを何回も作り、同じ講義を何回もしなければならなかった。しかし近年はITを上手に活用することで限りなく学生を訓練できる。特に考えさせるというより、覚えこませるためには効率よく繰り返して教えることが重要であるが、そのための最近の教育ソフトには素晴らしいものがたくさんある。本学が最近導入したラーニングボックスも上手に利用すれば以前に比較してはるかに少ない労力で教育効果が大きく上げられると推測している。

もう一つ重要なことは、先生自身が「この学生には国試問題は難しい」と学生の能力に対する信頼を失ってはいけない。成績不良学生の大半は能力がないのではなく、30%のポイントを把握していないだけで、ポイントがつかめれば大きく変化する。彼らは高校生活を終わるまでが前述の放蕩息子だったのである。したがって「この学生には国試問題は難しい、ではなく、この学生でも国試問題ぐらいは解けるようになる。」と彼らの能力を信じていることである。

多くの成績不良学生は、先生のこの信頼に応じて学力が驚くほど飛躍する。合否ラインぎりぎりの学生は、先生の情熱レベルに応じて限りなく合格レベルに達する。したがって、最終学年の学生に行くことは、留年をちらつかせて勉強させることではなく、合否ラインより少し下の学生に対しても君はやればできると心底信頼して指導に臨むことである。彼らは若いエネルギーを存分に使い果たし合格する。そして「私でもやればできる」という大き

な宝を得る。その宝は成績が振るわないレベルに応じて大きく、彼らの人生を変えて行く。これは私の前任の大学および本学における一回生の指導経験から確信していることである。

トコトンできるまで教育への期待と不安

最近「トコトンできるまで教育」として「留年ゼロ作戦」の考え方が本学の教育方針となった。しかし、現実には疑問視またはそんな教育は大学としてあるまじき教育である、と考えて真剣に取り組もうとしなかったり、こんな教育うまく行くはずがないと思いつつも仕方なく取り組んでおられたりする先生が多く見受けられる。このままでは「トコトンできるまで教育」は失敗することになり、学長が「先生方のお考え通り、私が間違っていました」と頭を下げることになる。その理由は明確である。多くの事業計画は、創設者の熱意とそれを理解し、支える周りの人たちによって成し遂げられる。学長と数人かがいくら頑張っても、初めから失敗すると思っ取り組んでいる教員が多ければ「トコトンできるまで教育」は成功しない。

国試に合格させるぐらいの実力養成を最低条件とするならば、留年させないことは前述のとおり得策である。しかしそのためには少量ポイントをしっかり把握させて進級させなければならないが、それがなされずにただ進級させてしまえば大きな悲劇が待っているのみである。

本学に今必要なのは、先生方がこの学長の教育方針を理解して取り組む情熱である。多くの教員が批判的または懐疑的に「トコトンできるまで教育」に取り組んでいると、数年後には卒業で引っ掛かる学生が大量に出るようになる。それは、進級の時に全体のハードルを下げて合格させるケースが増加し、学生は実力の無いまま進級するからである。こう言うと真面目な先生が良く次のようにお答えになる「同じ問題を何回やらせても出来ないのを通せと言うのだから、ハードルを下げるより仕方ないでしょ。」このセリフは間違っている。ハードルを単純に下げるのではなく、ポイントを少量ではあっても寝ていても答えられるようにすることが重要である。

最後に

教育事業は次世代を育てる重要な事業である。その業務に当たるものは強い倫理観，人を育てるための大きな愛情と，場合によっては一步も譲らない厳しさを持ち，次の時代を予見した教育をしなければならない。そのためにはまず自身の学問分野の自己研鑽（研究）を積まなければならない。F. A. W. Diesterweg は「学びてある教師のみ，人を教うるに値する。」と言っている。

本学にある「一に教育，二に研究」という言葉をはき違えて学生の国試合格を最上の目的として頑張っておられる先生を見受けるが，これは間違いである。本学の最終的な教育目標の一つは質の高い卒業生を育てることである。そのためにはご自身の専門分野でそれなりの業績を上げることは必須である。次の時代を予見するための能力獲得は，自身がその分野に深く頭を突っ込まねばならない。そんなこともせずに学生に国試レベルの知識を授けることに専念されている先生は次世代を育てる大学教員としてはふさわしくない。

繰り返しになるが，最も上手に教育する先生は，自分

の責任下にある学生を，愚かに甘やかすのではなく，その学生にとって最高の利益になる「私でもやればできる」という感覚を身に付けさせることを，親身になって考え，実行する先生である。そして学生は不合理，非論理，利己的です，それでもなお，学生を愛さねばならない。本学の多くの学生は頭が悪いのではなく，高校卒業まであまり勉強をしてこなかっただけのいわば放蕩息子たちである。留年で脅すことではなく，暖かく迎え入れれば人が変わったように勉強を始める。

— プロフィール —

長村 洋一 鈴鹿医療科学大学 客員教授，(一社)日本食品安全協会 理事長，藤田医科大学 名誉教授 薬学博士

〔経歴〕1971年岐阜薬科大学大学院博士課程修了，1971年名古屋衛生技術短期大学講師，1986年名古屋保健衛生大学（現在藤田医科大学）教授，2005年千葉科学大学教授，2008年鈴鹿医療科学大学教授。〔専門〕臨床化学。

Some proposals about our student education from my experience

—Education begins with love for students, and it is unreasonable to love—

Yoichi NAGAMURA

Suzuka University of Medical Science,
Japanese Association of Food Science and Risk Analysis

Key words: students repeated a grade, re-examination, prodigal son, Mother Teresa, national examination

Abstract

I have been in the field of education for about 50 years. Based on that experience, I would like to make the following proposals for our university's education. In our university, many departments produce a lot of students repeated a grade, that is a mistake. Instead of having to repeat a grade and start over, we have to do something that gives the student a sense of "I can do it" that will be the best advantages of the student without being stupidly spoiled. The story of the prodigal son in the Bible is a reference for such education. Many of our students are, so to speak, prodigal sons who haven't studied much by the time they graduate from high school. Instead of threatening them with repetition of a grade, if we warmly welcome them, they will start studying like another person. And they can easily acquire the ability to pass the national examination.